「けしからず」の用法

細川英雄

一　はじめに
二　形容詞「けし」の想定と分布
三　「けしう」と「けしうはあらず」
四　「けしうはあらず」と「けしからず」
五　「けしう」と「けしからず」
六　まとめ

一　はじめに

いわゆる世の中の道義に反した理不尽なふるまいや不埒な言動などに対して、わたくしたちは現在、「けしからん」という表現を用いることがある。

この「けしからん」という表現の源流を歴史的にさかのぼって見てみると、中古に「けしからず」という表現がすでに見られ、現在の「けしからん」とほぼ同じ意味・用法で用いられている例も少なからず発見できる。同時に中古の時代には「けしうはあらず」という表現形式も共存し、意味・用法の上で両者の間には深いつながりのあることが従来より指摘されている。

ところが、中古以前において、この形容詞「けし」がどのように用いられてきたかというと、たとえば『古事記』・『日本書紀』・『万葉集』などの上代文献では、連体形「けしき」しか見られず、漢字表記にはもっぱら「異」字が用いられ、意味的には、ものごとの今までと違っている様子や他のものと異なる状態をあらわす場合に用いられており、それがさらに、表面上の意味としては、「悪い」・「怪しい」などの意に解釈されることが多くあったとすることができる。(1)

このような歴史的な観点から見ると、「けし」の「悪い」・「怪しい」などの意が打消（否定）の「ん」によって否定される「けしからん」の意味は、「悪くない」・「怪しくない」というように、悪い意味が否定されて当然であり、中古以降の「けしからず(ん)」は、その構造と意味において論理的な矛盾をきたしていることになるのである。

すなわち、否定されながら否定の意味をあらわさないという矛盾を、この「けしからず」は、その表現中にはらんでいるわけである。

このような「けしからず」の論理上の矛盾については、すでに多くの先学の説かれるところではあるが、[2]「けしう」や「けしうはあらず」との関連で、その用法の差異などについては、まだ言及すべき点もあるように思われる。

本稿では、このような「けしからず」の論理上の矛盾をめぐって、言語の表現形式と人間の思考・心理のつながりを考えつつ、中古の仮名書き散文における「けしう」や「けしうはあらず」との用法上の差異などを手がかりとして、「けしからず」という表現について検討してみたいと思う。

二　形容詞「けし」の想定と分布

今かりに形容詞「けし」を想定した場合、語形の上から「けし」は時代順に次のようにあらわれている。

上代　けしき
中古　けしく（う）・けしから
中世　けしから・けしかる
近世　けしから
現代　けしから

ごく大掴みに捉えた場合、未然形「けしから」は中古以後、現代に至るまであらわれており、一見発達した活用形のようにも見えるが、これはすべて「けしからず（ぬ）」の形式で用いられている。上代に見える「けしき」が中古の「けしく（う）」・「けしから」に直ちに続くかどうかは疑問の余地もあるが、意味の上から考えて決して無縁であるとはいえまい。

また、中世以後の「けしかる」は、おそらくは「けしからず」との対比から生まれた当時の新造語とも思われるが、「けしかる」・「けしからず」がともにほぼ同義で用いられる点はきわめて興味深い。

以上の史的展望の中で実際にあらわれることがない活用形は、終止形・已然形・命令形であるが、未然・連用にしても、「けしから」・「けしう（音便形）」が共に「けしからず」・「けしうはあらず」の固定化した表現形式に多く用いられており、形容詞として発達した語とはいえない。

表1　形容詞「けし」の活用形別分布状況

資料＼活用形	けしから〈未然〉	けしう〈連用〉	けしき〈連体〉	計
伊勢物語	0	2	0	2
平中物語	1	0	0	1
蜻蛉日記	1	3	0	4
宇津保物語	14	19	1	34
落窪物語	10	4	0	14
枕草子	5	0	0	5
和泉式部日記	2	0	0	2
源氏物語	36	26	0	62
紫式部日記	4	0	0	4
堤中納言物語	3	0	0	3
夜の寝覚	4	1	0	5
浜松中納言物語	4	1	0	5
狭衣物語	3	1	0	4
計	87	57	1	145

＊『竹取物語』・『大和物語』・『土左日記』・『更級日記』には用例なし。

＊『蜻蛉日記』の「けしく」（非音便形）1例は省いた。

このような史的観点から直ちに形容詞「けし」の存在を認めるには余りに問題も多く、即断できない事柄であるが、本稿では中古仮名書き散文における「けしからず」の否定の構造について考える上で、まず、以上のような形容詞「けし」を想定し、これを足がかりにして検討をすすめることにしたいと思う。

右の表1からもわかるように、形容詞「けし」は、中古散文において「けしから」・「けしう」が専ら用いられており、連体形「けしき」は『宇津保物語』に一例見られるにすぎない。このことは、『古事記』・『日本書紀』・『万葉集』の上代文献においては、連体形「けしき」しか見られないことと比較して注目すべき事実である。

三　「けしう」と「けしうはあらず」

形容詞「けし」の連用形には、本来「けしく」があってしかるべきであるが、非音便形の「けしく」という語形は、現在知るかぎりでは、『蜻蛉日記』に一例見えるのみで[3]、その他はすべて「けしう」(音便形)となっている。

「けしう」について、まず次のような分類を試みた上で具体的な考察にはいろうと思う。

A「けしう」の中止法あるいは副詞的な用法で、同一文中に特に呼応関係の認められないもの

B「けしう・(は)・動詞・否定」の形式をとるもの(ただしCを除く)

C「けしう・(は)・存在をあらわす語・否定」の形式をとるもの

表2　「けしう」の機能分類

資料＼分類	A	B	C	計
伊勢物語	0	1	1	2
平中物語	0	0	0	0
蜻蛉日記	1	0	2	3
宇津保物語	0	2	17	19
落窪物語	0	0	4	4
枕草子	0	0	0	0
和泉式部日記	0	0	0	0
源氏物語	0	0	26	26
紫式部日記	0	0	0	0
堤中納言物語	0	0	0	0
夜の寝覚	0	0	1	1
浜松中納言物語	0	0	1	1
狭衣物語	0	0	1	1
計	1	3	53	57

＊『蜻蛉日記』の「けしく(て)」の例は省いた。

まず、Aは、「けしう」の中止法の用法あるいは副詞的用法を示す例である(用例の数字は、テキスト本のページ数を示す。以下同じ)。

①けしうつゝましきことなれど、あまにとうけ給はるには、むつまじきかたにても、おもひはなお給やとてなん　(蜻蛉・二六五)

中止法の用法と考えた場合、「けしう」と「つゝましき」は意味的には並列関係となるだろう。「けしう」も「つゝましき」もともに、本来隠すべき内容をあらわす表現であり、その場面的状況において表現者によって拒否されるべき意味内容を示すものであるとすることができよう。

また副詞的用法と考えた場合、「けしう」は「つゝましき」の程度の激しいことをあらわす働きを持っているとすることができよう。

つまり、副詞的用法とした場合の「けしう」には拒否されるべき意味は含まれず、もっぱら「つゝましき」を修飾する機能を持っているとすることができる。その際に「つゝましき」がその場面的状況において表現者によって拒否されるべき意味内容を示しており、このような意味内容をあらわす語をAの「けしう」が副詞的に修飾していることは、「けしう」の性格を考える上で留意しておくべきことであろう。同時に現在知るかぎりでは、同一の文脈の中に形式的な否定の語を含まない用例は、この①の例を除いて他にはなく、注目しておく必要があろう。

次にBの「けしう・(は)・動詞・否定」の場合を見てみよう。

②この女かく書きをきたるを、けしう、心をくべきこともおぼえぬを、何によりてかからむと、いといたう泣きて

(伊勢・一二四)

③(右大将)見給て、「あやし。こはなでうことゞもぞ。かねまさはこゝろえずや」との給ふ。上「けしう、そこは、こゝろえ給べきことにもあらずかし。おぼつかなくから、御なをはや。」

(宇津保・八四四)

右の②・③においても、「けしう」は中止法または副詞的用法の二通りに解釈される。

中止法の用法とした場合、「不思議である」・「変だ」等の意の連用形の音便形と考えることになろう。

副詞的用法とみた場合には、それぞれ「おぼえぬ」(②)・「こゝろえ給べきことにもあらずかし」(③)にかかって、その程度の度合の激しいことをあらわしているとすることができるが、この場合は、②・③とも否定「ず」と呼応し、解釈上、「それほど……ない」の意味となる。

たとえば次の用例④は、「けしう」のこうした性格をはっきりと示していることが指摘されよう。

④宮「なにかは。すくせはしらねども、さるまじらひせんにも、けしうは人にをとらじ」などのたまふ。(宇津保・三三一)

以上、AおよびBの、用例①〜④の四例のうち、①〜③の三例は形容詞「けし」の連用形(音便形)の中止法の用法または副詞的用法、④の一例は副詞的な機能を担った用法であることが確認された。

その際に、①〜③を中止法として考えた場合には、「怪しい」・「不思議である」・「変だ」等の意味に解釈され、副詞的用法とした場合には、被修飾語の程度を示し、場面の上で表現者によって拒否されるべき意味内容をあらわす語(①)あるいは形式的な否定の語(②・③)と呼応関係にあることを指摘することができる。

次に、Cの「けしう・(は)・存在をあらわす語・否定」の考察に移ろう。

表3　「けしう・(は)・存在をあらわす語・否定」の分類

資料＼表現形式	けしう・(は)・あら・否定	けしう・は・お はせ・否定	けしう・は・お はしまさ・否定	けしう・は・お はべら・否定	けしう・(は)・ 物し給は・否定	けしう・は・なし	計
伊勢物語	1	0	0	0	0	0	1
平中物語	0	0	0	0	0	0	0
蜻蛉日記	2	0	0	0	0	0	2
宇津保物語	12	1	0	1	2	1	17
落窪物語	3	0	0	1	0	0	4
枕草子	0	0	0	0	0	0	0
和泉式部日記	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語	19	2	1	3	1	0	26
紫式部日記	0	0	0	0	0	0	0
堤中納言物語	0	0	0	0	0	0	0
夜の寝覚	1	0	0	0	0	0	1
浜松中納言物語	1	0	0	0	0	0	1
狭衣物語	1	0	0	0	0	0	1
計	40	3	1	5	3	1	53

＊（　）は、助詞「は」の介在の有無の両用を示す。

右の表3からCの「けしう・(は)・存在をあらわす語・否定」の表現形式には、「けしう・は・あら・否定」の形式が最も頻繁にあらわれることが証されよう。

では、「けしう」と「あり」をはじめとする存在をあらわす語との関係を具体的に検討してみよう。

Cの形式で「あり」が実質動詞として用いられている例は、一例も見当らず、存在をあらわす語として「はべり」に実質用言の例が一例見えるのみである。

⑤左のおとゞ「(此のカ)の中にはけしうはべらずや侍らん。まさあきらの中納言、こやもたらひたらん。それもまだちゐさくなんきこえ侍る。」　（宇津保・三二二五）

⑤の場合、「侍り」は「存在する」の意の実質動詞と解釈することができ、「けしう」は、「はべらずや」の「侍り」を修飾して、「大勢」とか、「たくさん」の意に取ることになる。

ということは、表現形式としてはCの「けしう・(は)・存在をあらわす語・否定」の形式をとってはいるが、実際の文の機能の上では、Bの「けしう・(は)・動詞・否定」の形式と何ら変わるところはなく、「けしう」の副詞的な用法として、⑤をBの用例としてさしかえることができよう。

その他のCの「存在をあらわす語」は、すべて形式用言の用法である。

＊「けしう○あら(ず)」の場合（「は」を介在しない例）

左のおとゞ「なにか、さやうにすみ(マヽ)などし給はゞけしうあらじ」ときこえ給。　（宇津保・一四五七）

殿ことゞもうち見給ひて、「けしうあらぬ物共なめるに。衛門が導きなれば、足らはぬ事ありとも、いふべきにあらず」とうちの給へば、　（落窪・一七〇）

＊「おはす」・「おはします」の場合

さいつごろより、かくうけたまはれど、けしうはおはせずとありしを、このやまごもりの律師などめされけるに、おどろきてなん。　（宇津保・一四三〇）

何事も、いとかうな思し入れそ。さりともけしうはおはせじ。いかなりとも、必ず逢ふ瀬あンなれば、

（源氏・一・三四五）

けしうはおはしまさざりけるを、なにがしの朝臣の、心まどはして、おどろ〳〵しう歎き聞えさすめれば、

（源氏・三・一三〇）

＊「侍り」の場合

辞し奉らむかはりには、左大臣をなさせ給へ。さてけしうは待らざめり。されば翁よりも御後見はいとよくし侍りなん

（落窪・二四五）

ざえなどもつき侍りぬべく、けしうは侍らぬを、殿上なども思う給へかけながら、すが〳〵しうは、えまじらひざめる

（源氏・一・七四）

＊「物し給ふ」の場合

いたはらるゝ事ものし給なるをなん、いとおしがり申侍を、けしう物し給はずば、いかにうれしからん。

（宇津保・三七九）

日ごろはいかゞ。うちはへ、こゝにはなやましくなんあれば、またえたいめんせずやと思に、そこゝにはけしうは物し給はじを、しもつぼねにやは。うしろめたくはこそ。

（宇津保・一四一〇）

ゆゆしく。斯くなおぼしそ。さりともけしうは物し給はじ。心によりなむ人はともかくもある。

（源氏・四・五八）

右の「物し給ふ」の場合、中古の散文において、多く「あり」相当に用いられることについては、すでに指摘されているとおりである。[4]「けしう（は）物し給はず」の場合も同様に考えることができよう。

＊「なし」の場合

御息所「いとよき事なり、さおぼしたれば、たゞいまはこ宮にこそは、人とあるかぎりはまいり給はむ。たゞいまは宮のみこそは、ときことにおはしませ。それをはなちては、けしうはなかるべし。」

（宇津保・三三五）

「あらず」が「なし」に交替する現象として挙げることができる例[5]ではあるが、「けしうはあらず」の形式がかなり固定化されたものであったため、中古仮名書き散文においても多くは見られないのであろう（表3参照）。

一方、「けしうはあらず」等のCの表現形式の意味について考えてみると、そこには「際立っていない」・「格別でない」の意はなく、「悪くはない・さしつかえない・心配はない」等のように、「けしう」の部分に「悪い」等の場面の上で拒否されるべき意味を持たせて用いていることがわかる。

このことは、副詞的用法「けしう」がすべて「特に」・「非常に」の意味で使われていることと大きく異なる点で、「けしう」が「悪い・不都合である」等の意味を持つように解せられるのは、「けしうはあらず」等のCの表現形式においてであることが実証されると思う。

また、このC表現形式の意味を文脈にそって考えてみると、「悪くはない」等の形式どおりの意味から、むしろ「かなり良い」と解釈した方が適切ではないかと思われる場合も少なからずあることがわかる。

すなわち、現代語においても「悪くはない」という言い方が、場面的な状況によって「満更でもない」等の意味に用いられ、言外に「良い」ことをあらわすことがあるように、「けしうはあらず」等のC表現形式においても同様のことが言えるのである。ただ、「けしうはあらず」等が、そうした「良い」の意に変化するのは、あくまでも、文脈上の場面的な状況によるものであり、文法的には、「他と異なる」意の「けしう」に形式用言「あり」等の否定形（または形式用言「なし」）が承接したものと解釈することになるだろう。その際に、形式用言「あり」・「なし」等の存在をあらわす語の働きが、あくまでも「けしう」に状態性を付与することにあり、実質用言としての機能はないことに注目しておく必要があろう。

以上のようにA～Cの表現形式を考察してきた結果、「けしう」は、A・Bが副詞的用法として用いられるかぎり、すべて「際立って」・「特に」などの程度をあらわす意味を示しており、Cの「けしうはあらず」等の「けしう」とは、あらわす意味の上でその性格を異にするものであることがわかった。

つまり、Cの「けしうはあらず」等の形式の「けしう」は、上代で見たような「他と異なる」意の原義に近い意味（「際立っていること」・「格別であること」など）をあらわすことはなく、すべて「悪い」・「不都合である」等のように表現者によって拒否されるべき意味内容を示すものとして解釈され、すでに原義より派生した意味をあらわしていることが確認できる。

四　「けしうはあらず」と「けしからず」

前節でふれたように、「けしうはあらず」には、意味の上で、ただ「けしう」を打ち消すだけの「悪くはない」といった意味をあらわす

⑥ここにはけしうはあらず見え給ふを、まだいとただよはしげなりしを見捨てたるやうに思はるるも、（源氏・四・八七）

のような例から、

⑦女御を、けしうはあらず、何事も人に劣りてはおひ出でずかしと思ひ給ひしかど、（源氏・二・三一二）

のように、他と比較して劣らないことを示す意味をあらわす例もあり、さらに

⑧むかし、わかきおとこ、けしうはあらぬ女を思ひけり。[6]（伊勢・一三四）

⑨女をなむ隠しすゑさせ給へる。けしうはあらず思す人なるべし。（源氏・六・八七）

のように、かなり積極的に「良い」意に傾いているものもあり、文脈の上できわめて、ゆれの激しいものであるが、「悪くはない」の意から、さらに「人並である」あるいは「優れている」の意の婉曲的な表現として、否定の言い方が用いられていることが注目されよう。[7]

「けしうはあらず」という表現形式が、かなり固定化した表現であることは、その用例のあらわれ方からも判断でき、意味の上でも「けしうはあらず」の連語形式の固定化によって、「けしう」の部分に「悪い」・「不都合である」等の派生的な意味が定着したと考えられる面を持っている。その際に、助詞「は」の介在からも知れるように、「けしうはあらず」が完全に一語であるとは言いがたく、おそらく「けしう・は・あら・ず」のように、当時の人々の意識にはあったように考えられる。

とすると、「けしう」の部分に「悪いこと」・「心配なこと」・「さしつかえのあること」等の拒否すべき意味をその場面的状況において当時の人々はかんじとっていたにちがいないのである。

一方、「けしからず」の場合は、常に「けしからず」の形式であらわれ、当時すでに一語としての意識があったの考えられるが、意味の上では、「けしからず」(連用形相当)・「けしからず」(終止形相当)・「けしからぬ」(連体形相当)の各活用形にそれぞれ違いが見られ、検討の必要上、まず、前記のような活用形別の分布を明らかにしておこうと思う(表4参照)。

下の表4のうち、連用形相当の「けしからず」については、次節において副詞的用法「けしう」との比較検討の際に取り上げることにする。

まず、連体形相当の用法から見てみると、『宇津保物語』に、「つまらない」・「それほどでもない」[8]の意に解釈できる「けしからず」の用例を見出だすことができる。

表4 「けしからず」の分類

資料＼活用形	けしからず〈ざり〈連用〉〉	けしからず〈終止〉	けしからぬ〈ざる〈連体〉〉	計
伊勢物語	0	0	0	0
平中物語	1	0	0	1
蜻蛉日記	0	0	1	1
宇津保物語	0	1	13	14
落窪物語	3	6	1	10
枕草子	2	1	2	5
和泉式部日記	0	0	2	2
源氏物語	7	3	26	36
紫式部日記	1	0	3	4
堤中納言物語	1	1	1	3
夜の寝覚	3	0	1	4
浜松中納言物語	1	0	3	4
狭衣物語	1	0	2	3
計	20	12	55	37

⑩よの中のかくはかなければこそ、けしからぬわらはべのゆくさきおもひやられて、うしろめたうおぼえ侍れ。

(宇津保・二七六)

⑪こゝにこのはやうよりと申事の、このものし給人の、とし(と説カ)ごろなげき申給事を、まさよりよともにけしからぬあるじなどし給へるうちに、

(宇津保・三五二)

⑫心ある人のむすめどもなどはいとおほくて、男すくなき所なれば、なかよりらがけしからぬものに、よき女いとおほくつきてなむ、時めかすめる。

(宇津保・四八一)

用例⑩〜⑫は、いずれも「つまらない」とか「それほどでもない」等に解釈できる「けしからぬ」(連体形)の用例である。「けしうはあらず」の「悪くはない」の意が結果的には「良いこと」

を予想させるのに対し、「けしからぬ○○」は、すべて「良くない」ことを暗示しており、その意味で「けしからず」の一語自体に拒否されるべき意味が備わっているということができよう。

さらに、その拒否されるべき意味の高まった場合（「理不尽な」・「不埒な」などの意）をあらわす用法もある。

⑬「またけしからぬ物どものいまいできたるも御らんぜさせんと思ふ給ふれど、見ぐるしきさまなればなり」ときこえ給。

（宇津保・五八四）

⑭わが身をばさしおきて、さばかりもどかしく言はまほしきものやはある。されど、けしからぬやうにもあり、また、おのづから聞きつけて、恨みぞする、あいなし。（枕・二三六）

⑮「かくけしからぬ心ばへは使ふものか。をさなき人の、かかる事いひつたふるは、いみじく忌むなるものを」といひおどして、

（源氏・一・八九）

次に、終止形「けしからず」は、今回調べた範囲で、『宇津保物語』から『堤中納言物語』までに、一二例見ることができるが、ほぼ共通して言えることは、ほとんどが会話文（心中思惟文を含む）中にあらわれていることである。

⑯「いづちぞ、あなさはがし。かのおほいまうちぎみ大将のあそんのみにそ、いとけしからずや」とてひきとゞめ給へば、

（宇津保・一六二八）

⑰女君、「いとけしからず。いなとおぼさばおいらかにこそし給はめ。ほいなく、いかにいみじとおぼさん」との給ふ。

（落窪・一二六）

⑱わびては、好き好きし下衆などの、人などに語りつべからむをがなと思ふも、いとけしからず。

（枕・一〇六）

⑲「あやしの、人の親や。まづ人の心励まさむ事をおぼすよ。けしからず」と宣ふ。

（源氏・二・三九八）

⑳かく怖づる人をば、「けしからず、はうぞくなり」とて、いと眉黒にてなむにらみ給ひけるに、

（堤・三七六）

用例⑯～⑳のうち、⑱の『枕草子』の例だけは、地の文であるが、作品および文章の性格から作者の主観が相当強くあらわれた叙述の文であり、その点では、会話文相当に考えてよいのではあるまいかと思う。

また『宇津保物語』・『枕草子』の例は、述語として機能しているが、その他の「けしからず」は、すべて独立語として話し手の情意を強く反映する用法と認められる。つまり、話し手の対象に対する嫌悪・不快の感情が色濃く表現されているとすることができるのではないだろうか。

このように、終止形「けしからず」は、形の上では、終止形であるが、その用法からはむしろ情意性の強い独立語として用いられることも多く、中止法としての連用形「けしからず」や、連体修飾の機能を果たす連体形「けしからぬ」に用言の概念内容を客観的にあらわす働きがあるのに対し、今示したような「けしからず」は、概念内容もあらわすと同時に、強く話し手の主観的な情意を添える表現であるということができよう。

以上のような検討・考察から、中古仮名書きの散文において「けしうはあらず」があくまでも「けしう」の打消として「悪く

はない」等の意をあらわしているのに対し、「けしからず」は、一部の副詞的用法を除いて、すべて表現者によって拒否されるべき意味内容を示し、「つまらない」・「それほどでもない」等から「理不尽である」・「不埒である」等と解釈されている。その結果、「けしうはあらず」・「けしからず」の二つの表現は互いに抵触することなく、意味の上で、明確に使い分けられていたことが実証されよう。

五　「けしう」と「けしからず」

副詞的用法と解釈される「けしう」は、表2で見たように『伊勢物語』・『蜻蛉日記』に各一例、『宇津保物語』に二例（後でさしかえた用例⑤を入れると三例）見られ、その他の作品には現在のところ用例を見出すことができない。

一方、「けしからず」は初めにふれたように、中古の散文にはしばしばあらわれている（表1参照）。

ここで問題となるのは、副詞的用法の「けしう」と「けしからず」を比較した場合、意味の上でほぼ同義に用いられることがあるという現象である。

つまり「特に」・「非常に」等の意をあらわす副詞的用法の「けしう」が存在するのに対し、一方では、「けしからず」の方にも、ほぼ同じ意味に解釈できる例が見られる点である。

まず、「けしう」の用法が中止法あるいは副詞的なものに限られているところから、「けしからず」の場合も、その連用形の用法を、次のように分類して考えてみよう。

a 中止法の用法
b 連用修飾成分として用言にかかるもの
c 形式用言の承接するもの
d 接尾語「だつ」の承接するもの
e 助動詞「けり」の承接するもの
f 副詞的用法と判断できるもの

表5　連用形「けしからず」の用法と分布

資料＼分類	a	b	c	d	e	f	計
伊勢物語	0	0	0	0	0	0	0
平中物語	0	0	0	0	0	0	0
蜻蛉日記	0	0	0	0	0	0	0
宇津保物語	0	0	0	0	0	0	0
落窪物語	0	1	2	0	0	0	3
枕草子	1	0	0	0	0	1	2
和泉式部日記	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語	0	0	1	1	0	4	6
紫式部日記	0	0	1	0	0	0	1
堤中納言物語	0	1	0	0	0	0	1
夜の寝覚	1	0	0	0	1	1	3
浜松中納言物語	1	0	0	0	0	0	1
狭衣物語	0	0	0	0	0	1	1
計	3	2	4	1	1	7	18

＊aの例（三例）

男も女も法師も、宮仕所などより、同じやうなる人、もろともに寺へも詣で、ものへもいくに、好ましうこぼれ出で、用意よく、言はばけしからず、あまり見苦しとも見つべくぞあるに、（枕・一〇六）

「それ音聞いとけしからず、なを〳〵しきことなり。（夜の寝覚・三八七）

あらぬ所はなき物から、出で離れ逃げ隠れなんも、いとどけしからず、疎まれはてられたてまつらんも、（浜松中納言・二二二）

＊bの例（二例）

女君、「またいかなる事をし出し給はん。衛門こそけしからず成(り)にたれたぞいひはやす様に、いみじき御心をいふ」と恨み給へば、（落窪・一六八）

若人たちは、何事言ひおはさうずるぞ。蝶めで給ふなる人も、もはらめでたうもおぼえず。けしからずこそおぼゆれ。（堤中納言・三七八）

＊cの例（四例）

女君、「いと心うく、けしからずはおはせしと、おとゞ後に聞(き)給はん事もぞある。かくなの給(ひ)そ」（落窪・一四六）

衛門、「何かけしからず待らん。道理なき事にも侍らばこそあらめ」といへば、（落窪・一六八）

うちなど、あしざまに聞召さする人や侍らむと、世の人の物いひぞ、いとあぢきなくけしからず侍るや。（源氏・六・一三〇）

様々いづれをかとるべきと、覚ゆるぞ多く待る。さもけしからずも待ることどもかな。（紫式部日記・五九）

＊dの例（一例）

とてもかくても、疎々しく思ひ放ち聞えばこそあらめ、けしからずだちてよからぬ人の、時時物し給ふめれど、（源氏・六・五五）

＊eの例（一例）

いとけしからざりける心なりや。（夜の寝覚・二九七）

表5のa～eの「けしからず」は、いずれも「良くない」・「悪い」等の意に解釈されるものである。

それに対し、fの副詞的用法と判断した「けしからず」は、次の用例㉑～㉗の七例である。

㉑「けしからず、腹汚くおはしましけり」などいへば、（枕・二四八）

㉒斯かる心はあるべきものか、なのめならむにてだに、けしからず人に点つかる振舞はせじと思ふものを、（源氏・四・二）

㉓うちわたりなどの、みやびをかはすべき中らひなどにも、けしからず憂きことといひ出づるたぐひも聞ゆかし（源氏・四・一〇四）

㉔終にわが身は、けしからず怪しくなりぬべきなめり、といとど思ふところに、（源氏・六・一四四）

㉕心浅く、けしからず人笑へならむを聞かれ奉らむよりは、と思ひつづけて、（源氏・六・一五九）

㉖昔よりけしからず淡つけく、かろ〳〵しう、憂きものに、人に言ひそしらるゝを、（夜の寝覚・二五二）

㉗けしからず声高に、端近に色めかしきさまなどは見え給はましかば。（狭衣・二三七）

この㉑～㉗の七例から一様に言えることは七例すべてが何らかの形で、拒否されるべき意味内容をあらわす表現と関係があるということである。

すなわち、「腹汚く」（㉑）・「人に点つかる」（㉒）・「憂きことい ひ出づる」（㉓）・「怪しく」（㉔）・「人の笑へならむ」（㉕）・「淡つけく」（㉖）・「声高に」（㉗）のように、「けしからず」のかかっていく表現は、一様に表現者にとって拒否すべき意味内容をあらわす表現なのである。

このことは、副詞的用法とも解釈される「けしう」のうちに一例だけ見える

①けしうつゝましきことなれども、……（蜻蛉・二六五）

の「けしう」と同じ構造を持つものであるが、その他の副詞的用法の「けしう」がすべて形式的な否定の叙述を要求しているのに対し、「けしからず」の場合、形式的な否定ではなく、今述べたような表現者にとって拒否すべき意味内容をあらわす表現と深い関係にあることが対照的である。

そして、この「けしからず」に対し、「けしう」の中止法あるいは副詞的用法は、すでに見たように、中古のごく初期の成立と推定される作品にわずかに見られるだけである。

副詞的用法の「けしからず」は、意味の上では、従来の「けしう」と変わることなく、「特に」・「非常に」等のように程度副詞としての意味をあらわすが、必ず表現者にとって拒否すべき意味内容の表現を修飾する機能を有し、その機能において「けしう」と「けしからず」は大きく異なっていると考えることができる。

六　まとめ

以上、中古仮名書き散文における「けしからず」の用法を中心に検討してきた結果、およそ次のような点があきらかになった。

○「けしう」と「けしうはあらず」において「けしう」に「悪い」・「不都合な」の意味が定着するのは「けしうはあらず」の表現形式の固定化においてであること。

○「けしうはあらず」と「けしからず」において両者はそのあらわされる意味の上で明確に区別できること。

またその際に、終止形相当の「けしからず」には話し手の情意を強く反映する場合がしばしば見られること。

○「けしう」と「けしからず」において、副詞的と解釈される「けしう」が形式的な否定の語と呼応関係を持つのに対し、同じく副詞的用法の「けしからず」は表現者にとって拒否すべき意味内容を示す表現を修飾する機能を持つこと。

○以上のような「けしからず」の用法には、場面的状況と表現者の心理の影響が強く認められること。

＊

以上、「けしからず」を中心に関連諸表現の用法について整理を試みたが、では、なぜ「けしからず」という表現が成立したのか、という問いは未解決のままである。同じような問題を持つ語に「おほ(ぼ)ろけ(げ)ならず」・「なのめならず」などがある。改めて考える機会をもちたいが、ここから日本語全体の性格と否定の意識および表現のつながりを考える糸口をとらえることができれば幸いである。

注(1) 細川英雄「『けしきこころ』考—上代における形容詞『けし』について—」(『国語学 研究と資料』2 昭52・12)

(2) 「けしからず」の表現上の問題について指摘された論考のうち主なものは次のとおり。

山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(宝文館 昭15)二三三〜二三四頁

浅野 信『俗語の考察』(三省堂 昭18)二〇・四八〜五〇頁

浜田 敦「肯定と否定」(『国語学』1 昭23・10)

泉井久之助「否定表現の原理」(『言語の研究』〈有信堂 昭31〉所収)

楳垣 実『語源随筆 嫁が君』(東京堂 昭36)二一一〜二一八頁

原田芳起『平安時代文学語彙の研究』(風間書房 昭37)二八六〜二九八頁

木之下正雄『平安女流文学のことば』(至文堂 昭43)八三〜九一頁

吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(明治書院 昭46)一六二〜一七四・一九二頁

鈴木一彦『日本文法本質論』(明治書院 昭51)三〜一八頁

甲斐睦朗「否定と負性的価値—源氏物語表現論—」(『国語国文学報(愛知教育大)』31 昭52・3)

細川英雄『『馬莫疾打莫行』考—禁止表現史への一視点—』(『国語学 研究と資料』1 昭51・12)

佐藤喜代治編『国語学研究事典』(明治書院 昭52初版)には今後の研究の〔課題〕として次のような記述が見られる。

「けしからず」「負けず嫌い」などという打消の意のない「ず」の用法はいかにして成立したか、その心理的理由のほかに表現語法上何が考えられるか。

(吉田金彦氏担当執筆・一五六頁)

(3) 『蜻蛉日記』に見える「けしく(て)」の例は次のとおりである。

「こなたざまならでは、かたも」など、けしくて、「おほばこの神のたすけやなかりけんちぎりしことをおもひかへるは」とやうにて (蜻蛉・二五二頁)

(4) 中村幸弘「『ものし給ふ』考」(『国学院高等学校紀要』16 昭51・3) 同「存在詞『ものし給ふ』小考」(『浅野信博士古稀記念国語学論叢』〈桜楓社 昭52〉所収)

(5) 小林賢次「否定表現の変遷—『あらず』から『なし』への交替現象について—」(「国語学」75 昭43・12) 参照

(6) 定家本系「けしうはあらぬ」、大島本系「けしからぬ」とある。大島本系は後世の書写のため、両形を混同したものか。

(7) 否定の言い方がなぜ婉曲的な表現として日本語にしばしば見られるかは今後の問題としてきわめて興味深い。山口仲美「平安仮名文における軟化性の問題—源氏物語を中心にして—」(「国語学」112 昭53・3) 参照

(8) 『宇津保物語 一』(日本古典文学大系) 補注三一五 (五一〇頁) には、「けしからず」と「けしうはあらず」について

後者(「けし」)は前者(「けしかり」)よりも広い範囲に、即ち人間関係に限らずあらゆる方面に亘って用いられている。

とあるが、本稿では「けしからず」と「けしうはあらず」は意味・用法の上で対立するものであることを指摘する。

* テキストおよび本文の引用については『宇津保物語』は宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引 本文編』を、『源氏物語』は吉沢義則著『対校源氏物語新釈』を、その他は『日本古典文学大系』を使用した(本文中の用例の数字はテキストのページ数を示す)。

* 語彙の検索については次のものを使用した(諸本間で異同のある場合は専らテキスト本に拠った)。山田忠雄編『竹取物語総索引』塚原鉄雄・曾田文雄編『大和物語総索引』日本大学文理学部国文研究室編『土佐日記総索引』大野晋・辛島稔子編『伊勢物語総索引』曾田文雄著『平中物語総索引』佐伯梅友・伊牟田経久編『かげろふ日記総索引』宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引 索引編』松尾聡・江口正弘編『落窪物語総索引』田中重太郎著『枕草子総索引』東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『和泉式部日記総索引』木之下正雄著『源氏物語用語索引』石井文夫・青島徹編『紫式部日記用語索引』東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『更級日記総索引』土岐武治著『堤中納言物語校本及び総索引』『夜の寝覚総索引』『浜松中納言物語総索引』塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子共編『狭衣物語総索引』

* 本稿は「早大国文学会」(昭52・12・4) の研究発表をもとにしたものである。多くの方々からいろいろ御教示をいただいた。とくに桜井光昭先生には細部にわたる御指導をいただいた。記して謝意を表したい。